

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 15 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23320052

研究課題名(和文) 定家本伊勢物語・源氏物語の形成と展開に関する総合的研究

研究課題名(英文) Teika-bon manuscripts of The Tales of Ise and The Tale of Genji: General studies of their formation and deployment

研究代表者

加藤 洋介 (KATO, YOUSUKE)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：00214411

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果の一点目は、加藤洋介編『伊勢物語校異集成』(和泉書院、2016年2月)を刊行したことである。既刊の『伊勢物語』校本三種に所収の諸伝本について再調査を行い、3400箇所あまりに修正を加えた上で、さらに未収伝本の校異を追加したものである。成果の二点目は、定家本源氏物語についても同様の作業を継続し、全54帖の過半となる36帖の校異をホームページ上(<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~ykato>)に公開し、研究者の利用に供した。これについては今後も作業を継続し、源氏物語全巻に及ぼすことを目指している。

研究成果の概要(英文)：The first achievement of this research is the publication of the book Ise monogatari koi shusei (comparative corpus of The Tales of Ise), which was edited by Yosuke Kato (Osaka: Izumi Shoin Publication, 518 pages; 2016). The book contains a reexamination of three published variorums of The Tales of Ise. Moreover, it made over 3400 revisions to The Tales of Ise and added a comparison of uncollected manuscripts. The second achievement of this research is the continuation of the same work on the Teika-bon manuscript of The Tale of Genji. The Tale of Genji has 54 quires in total and this research has released comparison of 36 quires in The Tale of Genji on the website for other researchers to use (<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~ykato>). This work will be continued with the aim of completing all comparison of The Tale of Genji.

研究分野：日本平安文学

キーワード：定家本 源氏物語 伊勢物語

1. 研究開始当初の背景

伊勢物語・源氏物語の本文異同状況を確認する校本としては、池田亀鑑『源氏物語大成校異篇』(1953～56年、以下『大成』と略称)、および池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究校本篇』(1933年)・大津有一『伊勢物語に就きての研究 補遺篇』(1961年)・山田清市『伊勢物語校本と研究』(1977年)(以下「伊勢物語の三校本」と略称)がある。これらは源氏物語であれば一部の巻しか現存しない定家自筆本の復原を、伊勢物語では現在に伝わらない定家自筆の天福本・武田本の復原を目指し、鎌倉期写本や定家自筆本を伝えるとの奥書をもつ伝本を中心にデータ集成が図られたものである。

上記の校本やそれをういた方法には、大きく二つの問題点があった。一つは、今日の研究環境から見て校本としての精度が著しく低いことである。

研究代表者はこれまでに『大成』の河内本・別本校異の増補修正に従事してきたが、河内本校異で3,886箇所、別本校異で5,600箇所ほどに『大成』校異の補訂が必要であった。また定家本(青表紙本)についても一部作業を開始し、帚木巻125箇所・若紫巻78箇所・須磨巻72箇所・若菜上巻234所・若菜下巻116箇所など総計1000箇所以上の誤脱があることを確認していた。『大成』の定家本校異全体では、おそらくこの5倍程度の補訂が必要であろう。唯一の校本である『大成』定家本校異の修正作業は、まず最優先されるべき基礎的作業であった。

また「伊勢物語の三校本」についても事情は同様である。三校本所収の伝本についての再調査をほぼ終えていたが、池田校本の伝本柏筆本で108箇所、大津校本の藤房筆本で184箇所、山田校本の専修大学蔵本で128箇所など、全体で1338箇所におよぶ要訂正箇所がある。さらにこれらは底本が異なり、相互を参照するのに不都合な点も多く、底本を天福本に統一した上での統合校異データを提供することは、広く学界を裨益するものとなることが予想された。

また二つめの問題点として、数多く現存する室町期写本のデータが組み込まれていないため、源氏物語であれば、複数存在したであろう定家本を捕捉しきれないこと、伊勢物語の場合では、伝本に恵まれた天福本や武田本は復原可能であるものの、流布本(根源本)と称される一群の定家本について、ほとんど研究の進展が見られないことである。

2. 研究の目的

研究の目的として、以下の3点を掲げた。

『大成』定家本校異の増補修正作業

複製本や所蔵先に依頼しての複写、または直接調査によるデジタル撮影収集によって、『大成』校異の修正は可能である。また『大

成』刊行以後に発見紹介された鎌倉期写本はもちろんのこと、さらに本研究においては、これまでほとんど注目されることのなかった室町期写本についても、積極的に『大成』の校異に増補することにした。定家本源氏物語を復原する上で最も尊重されている大島本(古代学協会蔵)の本文が、実のところ定家自筆本から直接書写されたのではなく、室町期に流布していた本文に、定家自筆本(ないしはその転写本)による校合が加わったものであることを明らかにしたことがあり、これは「若菜下巻」のみを対象とした分析であったが、源氏物語54帖の他の巻についても同様の事情が指摘できることを確認していた。源氏物語の活字本は、この大島本を底本とするのが一般的であるが、室町期写本の本文が校合漏れによって入り込んでおり、それらを除くためには室町期写本のデータを相当数参照することが必要である。

「伊勢物語の三校本」の増補修正作業と『伊勢物語校異集成』の刊行

「伊勢物語の三校本」については、すでに所収伝本の再調査をほぼ終えていた。しかしながら源氏物語の場合と同様、室町期写本のデータを増補する必要があった。伊勢物語の場合、書写年時や書写者を奥書に記した伝本が多く現存しており、それらにより室町期に流通していた本文を把握することが可能である。定家本のうちの流布本(根源本)の実態解明のためには、これら室町期写本のデータが著しく不足していた。伊勢物語の個人コレクションとして著名な鉄心斎文庫をはじめとして、50本ほどの伝本調査を予定している。これらのデータを加えた上で『伊勢物語校異集成』の刊行を目指す。

「表記・改行・音便」の視点からみた室町期伝本状況と定家本の本文形成史に関する検討

上記の作業によって、室町期写本のデータを増補したうえで、その調査過程で得た「表記・改行・音便」という従来の研究では顧みられることのなかった視点を導入する。「れせい院 - 冷泉院」「ねうはう - 女はう」「おほん - 御」といった漢字・仮名の表記や「おほす - おもほす」「かやう - かうやう」などの同語の表記、「まして - まいて」「給て - 給うて」「うつくしく - うつくしう」という音便に関わる異同、地の文途中での改行などは、特定の伝本グループ内で共有される傾向が強く、伝本相互の関係を窺うのに格好の指標となりうる。これにより、本文異同のみからでは気づかれにくかった諸本の関係を明らかにし、定家本伊勢物語・伊勢物語の本文形成史を解明する。

定家本伊勢物語・源氏物語は、いずれも活字本の底本とされる重要な伝本群であり、その残存状況は非常によく似通っている。室町期写本により伊勢物語の天福本・武田本、源氏物語の定家自筆本はおおよそ復原可能である。ところがそれらとは異なる系統の定家

本も存しており、同一作品を数度にわたって書写していた定家本には、数段階の形成過程があった。伊勢物語流布本系統の鎌倉期写本および室町期写本、源氏物語の定家自筆本系統以外の鎌倉期写本と室町期写本が、定家本形成史のどの部分を反映しているのかが解明されていない。本研究はこれまで等閑視されていた室町期写本のデータを集積し、「表記・改行・音便」といった新たな視点を導入することによって、定家本伊勢物語・源氏物語の形成と展開の実相に迫ることを目的とした。両作品を横断的に検討し、伊勢物語から知られる定家本のヴァリエーションを源氏物語にも応用し、源氏物語から知られる「表記・改行・音便」の特徴を伊勢物語の側にも適用してみるという方法によって、伊勢物語・源氏物語双方の問題解明を図ろうとするのである。そのことは他の作品にも多く伝本が存する、定家本の様相を検討することへも波及させることも可能かと見込まれる。

3. 研究の方法

これまで『大成』所収の河内本および別本について、その校異データの補訂作業を行い、合わせて『大成』刊行後に発見・報告された伝本についても『大成』校異データへ増補する作業を行ってきた。こうした調査研究を行ってきた経緯からみて、『大成』定家本校異の補訂および増補作業は、以下のように進めることになる。

『大成』定家本校異について、機械可読データを作成する。

公刊された複製本あるいは紙焼写真等によって、上記で作成したデータと『大成』底本との異同状況を調査する。

上記で行った作業結果を、上記で作成したデータに入力し、第一次の補訂作業を実施する。

『大成』に採用された伝本の調査がすべて終了した段階で、巻ごとに入力状況や疑問箇所のチェックを行う。

原本調査が必要な箇所については、各所蔵先に出向き、必要な調査を行う。

上記～の作業に並行して『大成』未収伝本の調査収集を行い、さらに上記～の調査を各伝本について実施する。

源氏物語の場合、多くの有力古写本がすでに複製本という形で公刊されており、これによって上記の調査研究が可能となるものが、調査が必要な伝本の約半分を占める。すでに上記については作業を終え、実質的な調査および作業を開始している。複製本未公刊の伝本については各所蔵先で撮影されたマイクロフィルム等からの紙焼写真を入手する、あるいは直接デジタル撮影しての収集をすることになる。

桐壺・帚木・若菜上・若菜下・柏木巻などについてはすでに調査を開始しており、複製本が公刊されている『大成』所収伝本（三条

西家本・陽明文庫本・御物本など）について～の作業を実施する。また『大成』未収伝本のうち、複製本が公刊されていない伝本（熊本大学附属図書館蔵幽齋本・国文学研究資料館蔵正徹本）の収集を計画している。また調査を要する伝本のうちには個人蔵のものがあり、これについては所蔵者の許可を得た上でデジタル撮影を行い、調査研究に使用できるようにする。

源氏物語に関しては以上のような研究計画・方法をもって調査研究にあたる。またこの作業の過程では特に「表記・改行・音便」の様相を検証することで、定家本源氏物語の室町期写本について、大島本（古代学協会蔵）との関係、河内本・別本との関係、奥入付載本との関係、鎌倉期写本との関係など、あらゆる方面からの位置づけに関する研究を行う。

一方の伊勢物語については、上記～とほぼ同内容の作業を必要するが、複製本や紙焼写真によって校本所収伝本の約9割についての調査を終えている。すなわち上記の～までの作業を終えた段階にある。したがって～の作業を開始するとともに、「伊勢物語の三校本」未収の室町期写本の調査収集を行うことになる。伊勢物語の室町期写本には、書写年時や書写者が明示されているものも多く、当時どのような本文が流通していたのかを把握することが可能である。上記の作業を行った上で、「伊勢物語の三校本」の校異データへ追加してゆく。

また伊勢物語伝本の特殊事情として、大量のコレクションをもつ伊勢物語文華館鉄心齋文庫（小田原市）蔵本の調査収集が欠かせない。この個人コレクションについては、年2回直接出向いての調査とデジタル撮影による収集を行う。また池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究 校本篇』所収伝本を多く所蔵する東海大学桃園文庫についても、現地での直接閲覧しか調査の方法がなく、これも年2回の調査を計画している。

上記の作業を継続する中で、本文の異同のみならず「表記・改行・音便」のありようが、建仁二年本・承久三年本・武田本・天福本という定家本伊勢物語の展開において、実際にどのように変化していくのか、その実態の精確な把握に努めたい。それにより課題である流布本（根源本）の鎌倉期写本および室町期写本における展開の諸相を窺うという研究目的に迫りたい。

本研究では、研究組織を構成する上で研究分担者として、鉄心齋文庫本をはじめとする伊勢物語の伝本研究に関する第一人者である山本登朗氏が加わっている。伊勢物語伝本に関する調査や情報収集を担当する。

また上記の作業は、単純な作業ながら、の異同状況の調査と同程度の作業時間や労力を必要とする。長年にわたるこれまでの作業経験によると、龐大なデータ量ゆえ、頁数や行番号の入力ミスや、校異データの入力

誤脱などを避けることは難しいため、どうしてもこの作業は必要となる。そこで本研究では、相応の知識と能力をもった特任研究員を雇用し、この作業を担当してもらうこととした。伊勢物語・源氏物語にそれぞれ1名を配する。

研究代表者は・・・の作業を遂行する。こうした諸本調査は、多人数によって進める方が効率的であるかに見えるが、それによって発生する校異採択基準の揺れや作業の質の低下を懼れるものである。またそれぞれの伝本の細かい表記の差や、漢字と仮名の相違、和歌や章段の改行、朱合点、注記といった微妙な点こそが、「表記・改行・音便」に注目した研究には重要な指標となりうる。特に源氏物語のように54冊からなる浩瀚な作品の場合、巻ごと伝本ごとに状況は異なり、それぞれの伝本に通暁した上でのひらめきや気づきといった感覚が重要な発見の契機となる。したがってこれらの作業は研究代表者がこなすべきと判断した。

4. 研究成果

第一の成果として『伊勢物語校異集成』を刊行した。上記「伊勢物語の三校本」の校異を統合した上で、未収伝本の校異を追加し、さらに当初の計画にはなかった真名本も対象として加えることにより、計141点の伝本の本文異同状況を確認できるようになった。「伊勢物語の三校本」所収の伝本については可能な限り再調査を実施し、3400箇所余りの修正を加えた。これにより『伊勢物語』本文研究の基盤を支える基本資料を整えたことになる。

第二の成果として、『源氏物語大成』校異篇についても、未収伝本の校異データを加えたものをホームページを開設して公開した。桐壺巻以下、源氏物語全体の過半となる36の巻が対象となっている。全巻にわたる作業が完成したわけではないし、巻によって採用伝本が異なるなど不十分な点はあるが、今後とも引き続き作業を継続していく予定である。

上記二つの成果をまとめる過程で、定家本伊勢物語の展開を考える上で、勅物が重要な視座になることを発見し、学会発表も行ったが、いまだ論文化することができていない。これについても今後発表することを目指している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 7件)

- 1) 加藤洋介、「本文研究の可能性 - 定家本源氏物語の場合 - 」、『国語と国文学』、査読有、第91巻、2014年、pp.139~149
- 2) 加藤洋介、「三条西家源氏学の本文環境」、

『源氏物語注釈史の世界』(日向一雅編 青簡舎) 査読無、2014年、pp.71~91

3) 加藤洋介、「本文系統の認定をめぐる諸問題 - 書陵部蔵三条西家本源氏物語について - 」、『詞林』、査読無、第52号、2012年、pp.12~24

4) 加藤洋介、「河内本源氏物語の本文成立事情 - 手習巻再説 - 」、武家の文物と源氏物語絵』(高橋亨・久富木原玲・中根千絵編 翰林書房) 査読無、2012年、pp.107~115

5) 加藤洋介、「失われた定家本源氏物語 - 飯島本桐壺巻の場合 - 」、『詞林』、査読無、第50号、2011年、pp.1~13

6) 加藤洋介、「奥入付載の定家本源氏物語 - 飯島本若菜下・夕霧・総角巻の場合 - 」、『源氏物語の展望』(森一郎・岩佐美代子・坂本共展編 三弥井書店) 査読無、第十輯、2011年、pp.342~381

7) 加藤洋介、「奥入付載の定家本源氏物語 - 第二次奥入付載本の場合 - 」、『語文』、査読有、第96輯、2011年、pp.13~30

〔学会発表〕(計 2件)

1) 加藤洋介、「河内本・別本から見た定家本源氏物語」、中古文学会関西部会 第三十九回例会、2014年11月15日、佛教大学(京都府・京都市)

2) 加藤洋介、「承久三年定家本伊勢物語の復原」、中古文学会関西部会 第三十六回例会、2013年11月16日、武庫川女子大学(兵庫県・西宮市)

〔図書〕(計 1件)

1) 加藤洋介、和泉書院、『伊勢物語校異集成』、2016年、全494頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~ykato>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

加藤 洋介 (Yosuke Kato)
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：

0 0 2 1 4 4 1 1

(2)研究分担者

山本 登朗 (Tokuro Yamamoto)
関西大学・文学部・教授
研究者番号：

4 0 2 1 0 5 3 8